



国宝平家納経のうち「法華經如來神力品第二十一」 広島・厳島神社蔵 [4月26日～5月15日展示]

特集 千葉市美術館開館十周年記念

義経展

トピック

予告：近・現代日本美術のあゆみ

今年度の展覧会スケジュール

連載：ボランティア日和／展示室で考える

10周年の新年度を迎えて

千葉市美術館は、平成7年、1995年の文化の日、11月3日に開館しました。この秋で満10周年を迎えることとなります。4月からすでに、美術館にとって一つの区切りとなる節目の年度に入ることになるわけです。

そこで、開館10周年を記念する第1弾の特別展として、「義経展」を開催することとなりました。ご承知のように今年のNHK大河ドラマ「義経」と連動するもので、まさに「名宝でたどる義経の時代」の副題にふさわしい展観となっております。厳島神社や春日大社、高野山金剛峰寺や平泉の中尊寺など有力な寺社をはじめとして、全国の美術館・博物館、そして多くの個人コレクターにもご協力を仰いで、国宝19件、重要文化財28件を含む至宝約170点が一堂に会する豪華な内容となりました。当館にとって記念すべき年度にふさわしい、晴れがましい出だしとなったことを、これまでご支援をいただいていた皆様とともに心から喜びたいと思う次第です。

館長室には国の内外から様々なお客様が訪れます。その方々にいまだ日の浅い館の足取りをお伝えするために便宜となるよう、一連の書架に開館展「喜多川歌麿展」以来の特別展カタログを飾ってあります。それが一段だけではありますが左右二裱分、背表紙の総延長で計ると1メートル50センチほどの幅となっています。当館学芸員お得意の、浮世絵を含めた近世・近代の日本絵画や版画、そして現代美術についてはもとよりのこと、その守備範囲を遠く超えて、時には仏教美術やアジアの美術工芸品、さらにはアニメや現代根付にまで触手を伸ばしたこともあります。地元の県や市で活躍されてきた長老美術家の回顧展も実現しましたし、欧米や中国、あるいは国内の美術館、博物館からまとまったコレクションを拝借して、ユニークな味わいのある特別展を開催してもしました。短い時間の中でよくぞこれほどと、千葉市の文化的な発信拠点としてその一翼を担うことができたことを、若干の自負とともに回顧させられます。

それもこれも、展観や講演会などの各種イベントに足繫く館



国宝 紺糸威鎧兜・大袖付（伝平重盛所用） 広島・厳島神社蔵

を訪れてくださったお一人お一人のご支援の賜物に違いありません。学芸員や私の耳元まで届いてくる皆様の励ましや叱正のお声に、どれほど勇気づけられてきたか、計り知れないものがあります。またボランティアの皆様によるギャラリートークほかの様々な活動、学校の先生方や生徒諸君との親しい連携も年を追うごとに高まり、深まってきました。私が当館に招かれてから7年目になりますが、ますます確かな手応えを実感させられているこの頃です。

当館に寄せられるご好意は、遠く海外からも寄せられてきました。これまでも、英国の大英博物館、スイスのパウアー財団、中国の天津市芸術博物館、米国のクラーク財団やホノルル美術館などから、特色ある所蔵品をお借りして特別展覧会を催してきましたが、この秋の開館10周年記念展第2弾としてはイタリアのミラノ市が全市をあげて、「大ミラノ展(仮称)」という文字通り大規模な歴史的、美術的な展観を届けてくれることになっています。ルネッサンス期のレオナルド・ダ・ヴィンチや現代のモランディを含めて、ローマ帝国時代から今日に至るまでのミラノの文化的な歩みを一望できる展観となるはずですが、先に「全市をあげて」と申し上げたのは決して誇張した物言いではなく、文化担当助役の直接指揮の下に、スフォルツァ城博物館やブレラ美術館など市内の有力な美術館がこぞってその誇るべき所蔵作品を拠出してくれることになっています。最近になってようやくその作品リストが固まり、お披露目のための準備に拍車がかかってきたところです。どうぞ楽しみにお待ちいただきたいと思います。

なぜにミラノ市がそのような格別の好意を千葉市に寄せられるかという、しかるべき理由があるのです。それはミラノ市が近年2度にわたって開催した浮世絵展、1999年の「北斎展」と2004年の「浮世絵展」に、千葉市と当館とが協力を惜しまず、支援してきたからです。そのお返しに大きなプレゼントを用意してくれたというわけです。国を越えて信義を重んじた友情のあかしを、心から歓迎し、感謝したいと思います。

館長 小林 忠



レオナルド・ダ・ヴィンチ レダの頭部 15世紀
スフォルツァ城博物館



千葉市美術館開館10周年記念

義経展 - 源氏・平氏・奥州藤原氏の至宝 - について

千葉市美術館は今年11月で、開館10周年を迎えます。そこで新年度は記念の展覧会を準備していますが、第一弾として「義経展～源氏・平氏・奥州藤原氏の至宝～」を開催します。

ご承知のように今年のNHK大河ドラマは「義経」。劇的な生涯を生き、さまざまな伝説に彩られた悲劇のヒーローは、華やかな大河ドラマ向きなのでしょう、はたまた義経役のタッキー人気なのか、視聴率も好調との由。本展は、この「義経」に関連する企画として、NHK千葉放送局、NHKプロモーションとの共同主催により開催するものです。全国各地からのご協力をいただき、国宝19件、重要文化財28件を含む作品約170点が一堂に展示される(展示替えがあります)、大規模なものとなりました。義経ゆかりの遺品や、主要な合戦場面を描いた絵画、同時代の人々の肖像画や書、さらには平清盛が厳島神社に奉納した国宝「平家納経」をはじめとする美術工芸品などで構成し、若き源氏のスーパースター義経と平家一門の偉大なる指導者清盛、そして義経を庇護した奥州藤原氏の足跡をたどります。

会場は、8階と7階の両展示室をすべて使い、全7章を設けて構成いたします。以下、その一章ごとを簡単にご紹介し、ヴァラエティーに富んだ出品作品の一部を誌上にてご覧いただきましょう。

第一章は「源氏と奥州・みちのく」。奥州の二度の大戦、前九年合戦(1051～62)と後三年合戦(1083～87)で軍功を立てた源頼義・義家父子が、東国武士の信望を集め、源氏は武門の棟梁と仰がれるようになりました。この合戦を描いた絵巻のほか、源頼義・義家父子ゆかりの品や、国宝「源頼朝書状」(宝簡集巻二所収・金剛峯寺蔵・4月5日～17日展示)など頼朝ゆかりの品を展示します。伝北条政子奉納の国宝「梅時絵手箱」(三嶋大社蔵)や重要文化財「金銅琵琶」(丹生都比売神社蔵)など当時の見事な工芸品もご覧下さい。義経登場以前の源氏の動向です。

第二章は「平家一門の栄華」。平治の乱(1159)以後、「平家にあらずんば人にあらず」と豪語するまでに至った平家一門の絶頂期、平清盛は厳島神社を造営し華麗な「平家納経」を奉納しました。一門がその栄華を背景として文化面で果たした貢献を、遺された宝物に



国宝 源義経自筆書状 宝簡集所収
平安時代(寿永3年・1184) 金剛峯寺蔵



狩野探幽筆 義経図(牟礼高松図)
江戸時代 茨城県立歴史館蔵



重要文化財 海松円文螺鈿鞍 (伝源頼朝所用)
平安時代 奈良・手向山八幡宮蔵

見てゆきます。名高い国宝「平家納経」は、清盛が一門の繁栄を祈り発願し、長寛2年(1164)に奉納した三十三巻の経巻で、本展では前期(4月5日～24日)に「信解品第四」を、後期(4月26日～5月15日)に「如来神力品第二十一」を展示します。同じく厳島神社蔵の国宝「紺糸威鎧」(4月5日～17日展示)は、平重盛所用の鎧として古くから知られていたものです。兜も含め全体が揃い当初の面影をよくとどめた大鎧で、当時の工芸技術の粋を結集して作られたその重厚さには改めて圧倒されます。

そして第三章は「牛若丸から義経へ」。母の常盤、愛妾静御前、そして武蔵坊弁慶。義経を取り巻く人々と、七歳の時に入れられたという鞍馬山の紹介を経て、いよいよ義経の登場です。義経の数少ないゆかりの遺品のうち、国宝「源義経自筆書状」(宝簡集巻三十三所収・金剛峯寺蔵・5月3日～15日展示)も展示されます。

第四章は「栄光の源平合戦 一の谷から壇の浦まで」。ここから会場は7階へ移ります。義経の動向が比較的詳しく知られるのは、なんとといっても源平合戦での活躍ですが、義経が初めて合戦に参加してから壇の浦の戦いで平家が滅亡するまで、それはわずかに1年半のことでした。合戦場面を中心に描いた武者絵の屏風が武家に重用された様子で江戸時代初期からの遺品が少なくありませんが、名場面を細かく描き込んだ華やかな屏風の中に義経の姿を探してみるのも本展の楽しみのひとつでしょう。

第五章は「東下りの道」。源平合戦第一の殊勲者でありながら、兄頼朝との不和が決定的なものとなり、義経は吉野や比叡山に潜伏したのち奥州平泉入りが伝えられるまでの一年半、行方知れずになります。本章では、修験者(山伏)姿に身をやつし、北陸ルートをとったというその「東下り」の逃避行の道々で、義経に共感を寄せ、支えていたに違いない修験者や法師たちをしのびます。吉野、比叡山、白山、出羽三山ゆかりの珍しい品々のほか、展覧会で初公開の室町時代の絵巻「義経由来記」も必見です。

第六章は「奥州藤原氏と平泉の黄金秘宝」。北方の王者、奥州藤原氏は、特産の黄金による莫大な富を背景に、みちのくの中央に中尊寺を建立、平泉館を築いて拠点とし、都文化

の導入につとめ、約百年にわたり平泉文化が栄えました。本章では、国宝「金光明最勝王經金字宝塔曼陀羅図」(第1、2週展示)や、金色堂内具のうちの国宝「迦陵頻伽文華鬘」、国宝「螺鈿平塵案」など、中尊寺の秘宝を中心にこの平泉文化の華をご覧ください。そして、文治5年(1189)閏4月30日、ついに義経は、藤原基成(泰衡母の父)の宿館「衣河館」にて泰衡におそわれ、持仏堂で妻と娘を殺し自害したと、鎌倉幕府編纂の歴史書『吾妻鏡』は伝えています。

最後の第七章は「滅びし者への愛惜」。南北朝・室町時代になると『義経記』『弁慶物語』などが成立し、さらに能や御伽草子、幸若舞・浄瑠璃などでおびただしい数の物語が作られていきました。江戸時代以降英雄としての義経はゆるぎないものとなって浮世絵などに表現され続け、近代になると史実や伝説を独自にとらえなおした歴史画など種々の名作が誕生しました。ここでは浮世絵版画と近代日本画に表された義経と源平の世界を紹介します。幕末明治の浮世絵師大蘇芳年による「義経記五条橋之図」(後期展示)は、義経と弁慶の争闘する「五条橋」図のなかでも印象深い名品で、今回のポスター・チラシのデザインにも一部を使いました。前田青邨による近代歴史画の記念碑的大作「洞窟の頼朝」(前期展示)や、義経好きとして知られた安田靫彦の代表作「黄瀬川陣」(後期展示)にも是非ご期待下さい。

展覧会をよりよくお楽しみいただくための関連イベントも多数準備しました。企画委員長として本展をご監修下さった有賀祥隆先生や、このほど完結した全四巻の『宮尾本 平家物語』(朝日新聞社刊)が大河ドラマの原作となった作家の宮尾登美子先生によるご講演はもちろんのことですが、特にご紹介したいのは「薄墨」の銘をもつ義経ゆかりの龍笛(静岡・鉄舟寺蔵)の音色を、横笛演奏家の赤尾三千子さんが演奏する4月30日(土)のさや堂コンサートです。義経が父の形見として常盤から託されたものを東下りに際して奉納されたとも、矢作の宿にて一夜を過ごした折に浄瑠璃姫に形見として贈ったものともいわれる由緒ある古い笛。文禄4年(1595)年に駿河城主が補修したときの漆状が残り、近年も楽器として演奏に耐えるように修復がなされるなど、人々の手により大切に伝えられてきました。展示ケースのガラス越しに見るだけで美しい楽器もありますが、その音色を実際に堪能できるというまたとない機会です。義経の命日は閏4月30日ということで、この日を設定しました。当日は舞もあわせご覧いただけるプログラムを練っているところです。



大蘇芳年 義経記五条橋之図 くもん子ども研究所蔵

さらに、「義経展」の会期にあわせ1階のさや堂ホールでは、千葉展独自の関連展示として、「源頼朝・義経と千葉常胤」(千葉市立郷土博物館・千葉市美術館共催)を開催します。全国津々浦々に源平ゆかりの地があり、「義経伝説紀行」の企画が続々と展開されていることを毎日目にする昨今ですが、この房総の地も例外ではなく、銚子など義経が立ち寄ったとの伝説を伝える地やそれに基づく地名もたくさんあります。史実としては、千葉常胤が頼朝を支えたという関係が重要で、これに焦点をあてた展示となり、鎧の試着などの体験学習(4月9日)や、講演会(5月7日)も行う予定です。同時開催として、平泉文化を史跡の出土品などの展示により紹介するコーナーも岩手県の主催により設けられ、あわせて無料ご覧いただくことができます。こちらにつきましては詳しくはお問い合わせください。

本展は、兵庫、岩手と3会場を巡回しますが(3会場あわせた出品総数は211点)、この千葉市美術館にて幕開けということになります。全42カ所にのぼる各地のご所蔵者のもとへ、巡回館の担当で分担して作品の借用にお訪ねして、連日ひとつひとつの作品・宝物と対面すると、頭の中の展覧会イメージが一気に具体的な物の集合体としてあらわれてきました。皆様のご期待に違わぬものと、会場の施工等々もいろいろと工夫をこらしております。是非みなさまのご来館をお待ちしております。

(学芸員 松尾知子)

龍笛 銘 薄墨 (伝源義経所用) 鎌倉時代 鉄舟寺蔵



義経展 - 源氏・平氏・奥州藤原氏の至宝 -

2005年(平成17)4月5日(火) - 2005年(平成17)5月15日(日)
10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで[ただし4月29日(金・祝)は18:00まで]

* 入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】

毎週月曜日

【入館料】

一般 1000(800)円

大学・高校生 700(560)円

中・小学生 300(240)円

()内は団体30人以上の料金



義経展関連企画

【講演会】

義経の時代の文化と美術

- 平家納経と金光明最勝王経金字宝塔曼陀羅の美意識 -

講師：有賀祥隆（東北大学名誉教授）

日時：4月17日(日) 午後2時より

会場：千葉市美術館 11階講堂

定員：150人先着順 聴講無料

【ワークショップ】

義経ものがたりにふれてみよう

講師：一龍斎貞友（講談師）/ 金井ひろみ（造形作家）

日時：4月23日(土) 午後2時より

会場：千葉市美術館 11階講堂

定員：40組 参加無料

義経が登場する昔話を、映像を通して聞いたり、実際に語ってみたり...。そのあと扇面の作品づくりに挑戦します。対象は小学生とその保護者ですが、お話はどなたでも自由に聞くことができます。参加ご希望の方は、はがき、FAX(043-221-2316)、または電話(043-221-2311)にてお申し込み下さい。絵の具かクレヨンセットを各自ご持参下さい。

【さや堂コンサート】

風の伝説「薄墨」～義経の笛～

出演：赤尾三千子（横笛演奏家）

日時：4月30日(土) 午後2時より

会場：千葉市美術館 1階さや堂ホール

定員：150人先着順 入場無料（義経展チケットの半券をご提示下さい）

本展出品作で「薄墨」の銘を持つ義経ゆかりの龍笛を演奏します。

チラシに4月30日(日)とありますが、4月30日(土)の誤りでした。

お詫びして訂正いたします。

【ギャラリートーク】

毎週水曜日 午後2時より

【特別企画】

宮尾登美子氏による特別講演会

(作家 / 大河ドラマ「義経」原作者)

日時：5月10日(火) 午後2時より

会場：千葉市文化センターアートホール

(JR千葉駅より徒歩10分、美術館より5分)

定員：500人 入場無料(義経展チケットの半券をご提示下さい)

聴講ご希望の方は、往復ハガキに住所・氏名・電話番号・年齢・希望人数(1枚につき2名様まで)を明記し、千葉市美術館「講演会係」までお申し込み下さい。4月30日(土)必着。(申込多数の場合は抽選となります)

【ご案内】

入場券が割引になります！！

東京藝術大学大学美術館で3月25日 - 5月8日まで開催される、「厳島神社国宝展」の入場券の半券を、会場の当日券売り場までご持参ください。(1枚につき、1人有効)

一般 : 1000円 900円

大学・高校生 : 700円 600円

また、同様に「義経展」の入場券の半券にて、東京藝術大学大学美術館の「厳島神社国宝展」を以下の割引料金でご入場いただけます。

一般 : 1200円 1100円

大学・高校生 : 800円 700円 (中学生以下無料)

ボランティア日和 episode 7

私たち美術館ボランティアは「美術館を楽しもう」のスローガンをもっています。このスローガンの中には各自がいろいろな思いを入れています。私は「美術を学び、その楽しさ、感動を多くの人と共有したい」という思いをもっています。

幸い美術館ボランティアは、美術館という場を通して身近に美術に接する機会があり、日々新しい経験をさせてもらっています。その喜びを来館者のみなさまにどう伝えるか、まだ十分ではありません。

展覧会「モノクローム絵画の魅力」(平成16年9月7日～11月23日)のときのことで。鑑賞教育で中学生の子どもたちの案内をしました。展示室に入り、桑山忠明の作品と対面したとき、子どもたちから歓声があがりました。何もない展示室という白い空間に、光を柔らかく拡散させている平滑な平面の、メタリックなパネルが壁面に設置されている、そんな部屋です。子どもたちは新しい経験を、この空間に入ったことで体感したのだと思います。子どもの日常生活、学校生活と離れて別世界に入った新鮮さを与えたのではないのでしょうか。

個性豊かなメンバーが揃うボランティアの会。みんなで決めた合い言葉の下、めざすものは同じでも、やり方は人それぞれに違います。さて、重野さんの場合は・・・。

このとき私は一緒に作品を見ることの楽しさを、「美術館を楽しもう」のスローガンの一場面を、子どもたちから与えられました。
美術館ボランティア 重野誠一

深沢幸雄銅版画展の図録作りに参加するボランティア





小林清親 獅子図 1884年 当館蔵

近 日 ・ 本 現 代 美 術 の あ ゆ み



若い仲間たち 1955年 当館蔵

1995年11月に開館した千葉市美術館も、この秋で満10年を迎えます。

美術館活動の核となる所蔵作品の収集はそれより以前にさかのぼります。今回の「近・現代日本美術のあゆみ」展は、当館がこれまで収集してきた作品 絵画・版画・写真・彫刻の各ジャンルにわたります を中心に構成するものです。

日本美術のあゆみを振り返ると、そこにはさまざまな表現による多彩な作品があります。とりわけ、幕末から今日までの美術は時代の移り変わりに対応するかのよう大きな変化を示しています。

本展示では、世界観や価値観などといったものの考え方が何度も変転した約150年間の動向をいくつかの傾向に分け、わが国における近・現代美術の精華を次の七つのコーナーに分けてご紹介します。

1. 江戸から明治へ 月岡芳年・小林清親・井上安治

まず展覧会最初のとりかかりとして、浮世絵を通して江戸と明治というふたつの時代について考えます。

2. 「芸術家」の誕生

明治期には、美術の世界では従来の「絵師」や「画工」といった存在とは違う意識 自己の社会的な自覚や美意識などを持った人々、「芸術家」たちが新たに出現しました。この両者が混在する時代の断面を紹介します。

3. 近代の日本画 東と西

このパートでは、明治～昭和期に制作された日本画を展示します。ひと口に「日本画」と言ってもその表現には幅があり、また関東と関西では作品の持つ雰囲気に対する嗜好に違いがあります。今回展示する作品のなかでは、描かれた女性のすがたがとりわけこの問題を提起しています。

4. 「こころ」を描く 抽象表現の誕生 I

日本における抽象表現の模索は明治後半から始まり、大正期に入ると本格的なものになります。ここでは、版画家・恩地孝四郎の作品などから、わが国での抽象表現が成立した基盤を探ります。

5. 「者(人間)」から「もの(物)」へ 抽象表現の誕生 II

ここでは1945年以降に制作された作品を中心に、引き続き抽象表現について紹介します。特に、人間の姿をテーマとした作品を多く取り上げることによって、時代と共に変化する造形を紹介いたします。

6. 伝統的な表現と国際的な表現

勅使河原蒼風・棟方志功・比田井南谷

1945年の第二次世界大戦の終結以後、10年以上中断していた日本と欧米との交流が再開された時、まず注目を集めた存在は、一般的な画家よりもむしろいけばなや版画、そして書道といったジャンルで活躍した人々でした。なぜ彼らが海外で受け入れられたのかについて、再考します。

7. 現代美術の導き手 斎藤義重・吉原治良・山口長男

最後のパートは、戦前から活躍し、1950年代以降に登場したアーティストたちの多くを指導した三人です。彼らの作品から、現代美術が獲得した表現の、いくつかの傾向を紹介します。

出品作品は約130点。本来であればひとつひとつのコーナーが大規模な特別展になってしまうような欲張った内容ですが、本館のコレクション展が皆様の美術理解の一助となれば幸いです。

学芸員 薫科英也

主な出品作品

- ・ 小林清親(1847-1915) 《獅子図》(1884)
- ・ 鍋木清方(1878-1972) 《薫風》(1918頃)
- ・ 橋本閑雪(1883-1945) 《水城暮雨図》(1919)
- ・ 棟方志功(1903-1975) 《釈迦十代弟子二菩薩》(1939)
- ・ 山口長男(1902-1983) 《構成 黄迷》(1955頃)
- ・ 勅使河原蒼風(1900-1979) 《萬木千草》(1960)

近・現代日本美術のあゆみ

2005年(平成17)5月21日(土) - 7月3日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般 200(160)円

大学・高校生 150(120)円

中・小学生 100(80)円

()内は団体30人以上の料金

ブラティスラヴァ世界絵本原画展～広がる絵本世界

7月9日(土)～8月28日(日)



出久根育『あめふらし』より 2001年 ©出久根育

スロヴァキアの首都ブラティスラヴァで2年に一度開催される国際絵本原画展の第19回展(2003年秋開催)より、受賞作品と日本人作家の作品を中心に紹介します。また、面白い素材や技法を用いた原画にも注目し、絵本だけにとどまらず、絵画や立体、オブジェなど、豊かに広がってゆく歴代受賞作家たちの楽しい造形世界もあわせて紹介します。

画人たちと千葉

7月9日(土)～8月28日(日)

千葉に住んだ画人がいて、千葉を描いた画人がいます。石井林響と大網白里、椿貞雄と船橋、浜口陽三と銚子など、住処となり、モチーフとなった土地と画人たちの関わりを見つめ、彼らが残した言葉やエピソードとともに作品を紹介します。

写楽・歌麿と黄金期の浮世絵

9月3日(土)～10月16日(日)

天明・寛政期(1781-1801)は、浮世絵の黄金期ともいわれてきました。この時期には鳥居清長、東洲斎写楽、喜多川歌麿といった優れた浮世絵師たちが活躍し、華やかで豊かな表現が展開されます。この時期の浮世絵の全貌と魅力をお楽しみいただけます。



喜多川歌麿 納涼美人図 寛政(1789-1801)中期 当館蔵

青木コレクションによる 幕末明治の浮世絵

9月3日(土)～10月16日(日)

浮世絵は常に身近な風俗を題材として発展してきました。江戸から明治という時代の変わり目に、浮世絵はどのように題材を選び表現してきたのでしょうか。日本橋魚河岸の魚商が、その当時に集めたというコレクションは、時代の息吹を伝えてくれます。

*2005年3月時点での予定です。都合により展覧会名、日程、展示内容の一部が変更となる場合がございます。

大ミラノ展 都市の芸術と歴史

10月25日(火)～12月4日(日)

ミラノ市の全面協力を得てブレラ美術館などミラノに所在する美術館・博物館からの出品作品で構成されます。ローマ帝国時代の初期キリスト教美術から、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ブラマンティーノなどのルネサンスの名品、モランディ、セガンティーニといった近現代美術まで約70点によりミラノの歴史・文化・芸術の魅力を紹介します。



ロット 若者の肖像 スフォルツァ城博物館蔵

江戸絵画のたのしみ

10月25日(火)～12月4日(日)

江戸時代の絵画のたのしい見方を発見してください。文人画、狩野派、琳派などさまざまな作品を紹介します。

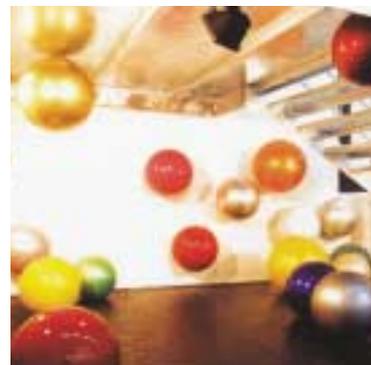


田能村竹田 六連島舟遊図 天保4(1833)年 当館蔵

スイス現代美術展

12月17日(土)～2月26日(日)

スイス人アーティストの作品を通して、観光地というイメージの裏側にある現実のスイスの一端を紹介する展覧会です。インスタレーション、ビデオアート、写真を中心に、現在国際的に注目を集めているアーティストたちの作品を厳選して紹介します。なお本展は、ダイナミック・スイス(日本におけるスイス年)関連企画のひとつです。



ウーゴ・ロンディノーネ サンタ・フェ 2001年

第37回千葉市民美術展

3月4日(土)～3月24日(金)

市民芸術祭の一環として、千葉市美術協会会員および公募入選作品約1000点を、7部門に分けて展示します。

展示室で考える

千葉市美術館を含め、多くの美術館の展示室にはガラスがあります。展示ケースのガラス、額の前にはまっているガラス、照明器具についているガラスなどさまざまなものがありますが、今回は展示ケースのガラスや額のガラスなど、作品と見る人の間に立ちふさがるガラスについて考えてみましょう。このガラスの目的はいうまでもなく作品の保護です。作品の周囲の空気の高湿度を一定にし、望ましくないガス分があまり多く表面に触れないようにするのと、見る人が作品に悪さを防ぐのがガラスの役目です。外気との出入りを遮断し気密性の高いエアタイト型のケースは、湿度管理の役割も大きいのですが、現在最も重要なのは、見る人が故意に、あるいは間違っただけで触るのを防ぐことにあります。

皆さんの中には、お茶室でお茶をいただいたことのある人も多いと思います。その時、床の間にはおそらく掛軸が掛かり、お茶碗は手に取って眺め、それで茶を飲まれたはずですが、お茶室でなくても、床の間の掛軸とそれを見る人の間にガラスはありません。襖や障子、屏風などは、部屋を仕切る道具ですから、その前にガラスを設けたりはしません。したがって襖絵や屏風絵の前にガラスはありません。床の間に置かれた置物と私たちの間にもガラスはありません。お寺の仏像と礼拝者の間にもガラスはありません(最近ではガラスで遮るところもあるようですが)。欧米でも額装の油絵はガラスなしで部屋に掛けていますし、教会の壁画や彫刻の前にガラスはありません。

当たり前ですが、ガラスがあるから作品がよく見えた、ガラスがあるから作品が見易くなったということはありません。もし、誰もが注意深く作品を見て悪さをしなければ、ほとんどの場合、ガラスは必要ありません。作品と見る人の距離も縮まり、それこそ目の前で作品を見ることができるようになるでしょう。お寺にはまっている貴重な襖絵も、廊下から眺めるのではなく、部屋の中で見るようになるでしょう。

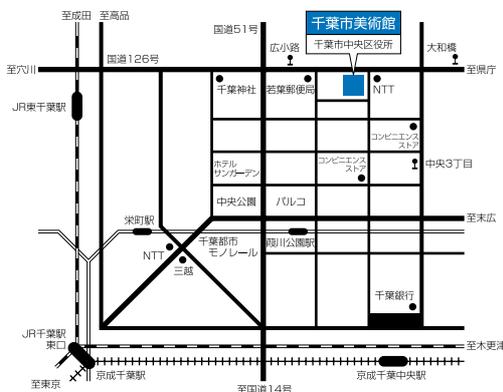
数年前のことですが、アメリカのボストン美術館に行っ

た時、たまたま大きな「モネ展」を開催していたので、喜んでそれを拝見しました。大部分の作品が額装の油絵でした。その額にはガラスがはまっているものと、ガラスなしのものがありました。世界各国から借りての展覧会なので、所有者がガラスをはめている場合とはめていない場合があります、それがそのまま反映されているわけです。どういうわけか、日本からの出品作はすべてガラスがはまっていた。作品がかなり高めに、見上げるような位置に並べてあったのは触りにくくさせるためと、後ろからでも見えるようにするためでしょう。作品の高さを決定するに際し、展示責任者は、人が触れにくくすること、見易くすることの両立に悩んだに違いありません。

当館で数年前に「東山魁夷展」を開催したときは、照明に悩みました。100号、200号という大きな作品が多く、なおかつすべてにアクリルガラスがはまっていたからです。ガラスがあれば、程度の差はあれ、ガラス表面での反射により、ガラスが鏡のようになり、見ている人や背景が映り込むのを避けることはできません。もちろん照明で工夫はしますが、完全に防ぐのは無理です。作品を両側向かいあわせにならべたりすれば(そうせざるをえないことが多いのですが)反対側の作品がガラスに映り、鑑賞の妨げになります。その時は4万人近い入場者がありましたので、苦情がたえませんでした。

美術館でも、陳列の仕方や照明を工夫したり、無反射ガラスを使用したり、いろいろ考えていますが、鑑賞のためにはガラスがないのが最高なのです。2年ほど前に当館で「浜口陽三展」を開催した時、特別に当館所蔵の浜口の銅版画数点をガラスなしで展示したことがあります。触られないように注意しなければならず、看視の方には大変な苦勞をかけたのですが、大層好評でした。作品の細かな肌合いを直に感じることができ、魅力数倍という人が多かったように思います。

展示室のガラスをすべてなくするのが現状では無理なのは百も承知しているのですが、ときどきそういう美術館を夢に見ます。(as)



JR千葉駅東口より徒歩約15分 / 千葉都市モノレール県庁前方面行「菟川公園駅」下車徒歩5分 / バスのりば⑦より大学病院行、南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分 / JR千葉駅へは東京駅地下ホームから総武線快速千葉方面行で約42分

京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ貝塚ICで出て国道51号を千葉市街方面へ約3km 広小路交差点近く

地下に駐車場有り



【編集・発行】 千葉市美術館 〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2005年4月15日

【印刷】 株式会社プリンテックメディア

